

2004年8月、旧知の教授に誘われ、彼の故郷アンディジャンへ。お世話になった教授の甥Aさん宅の中庭にて(後列左から2人目が筆者)



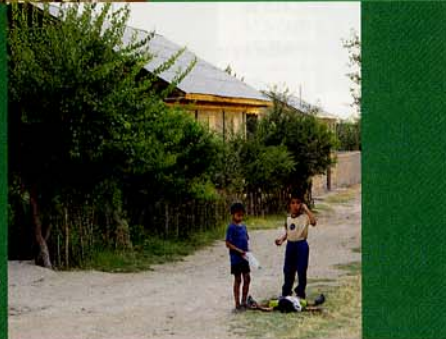
早朝のヤキの乳しぼり。Aさん宅では大人も子どもも皆が早朝からお祈りをし、休む間もなく働く



中庭で横になりつらく教授と
そのもてなしに忙しいAさん



通りで遊ぶ子どもたち。
家々の中庭にはブドウ、ナシ、
アンスなどの果樹が並び



府の反応は理解できる。ある意味ではアンディジャン事件は中央アジアの片隅で起きた単なる地方暴動ではなく、グローバルな問題とローカルな問題が交錯する歪みのなかで生じた悲劇であり、事件後もアンディジャンの、そしてウズベキスタンのかかえる根本的な問題は何も解決されていない。皮肉なことに、アメリカは「対テロ戦争の正義のもとに目をつぶってきたウズベキスタンの民主化・人権問

題をもはや看過するわけにはいかなかった。ウズベキスタンもその気配を敏感に感じとり、この事件を契機に、九・一一以降のウズベキスタンとアメリカの蜜月時代は終わった。ウズベキスタンは急速にロシア、中国との距離を縮めつつある。

アンディジャンの豊かさ、美しさ

悲惨な事件の舞台となった広場の名

前「バーブル」とは、アンディジャン出身で後にインドにムガル朝を築いたティムール朝の王子の名である。彼の手になるチャガタイ・トルコ文学の最高傑作「バーブル・ナーマ」(間野英一訳、松香堂、一九九八年)には、故郷アンディジャンの豊かさや美しさがつづられている。豊富な穀物と果物、とりわけすばらしいメロン、ブドウ、ナシ。四人がかりでも食べきれないほどよく太っ

たキジ。美しい住民。川の両岸に広がる庭園、春に咲くすみれ、チューリップ、バラ。アンディジャンが流血によってではなく、こんな豊かさや美しさで再び知られる日が来るように、そして第二のアンディジャン事件がウズベキスタンで起こることのないように、心から祈りたい。

二〇〇五年五月二三日の惨劇

ウズベキスタン東部の町、アンディジャンで二〇〇五年五月二三日、多数の市民が銃火の犠牲となった事件が起きてから、一年と少しが過ぎた。アンディジャン事件とよばれるこの事件は、一群の人びとが市内の軍駐屯地などを襲撃し、刑務所の囚人を解放。人質をとって州庁舎に立てこもり、これに対して軍が出動

し、多数の犠牲が出たというものである。ウズベキスタン政府公式見解はこの事件を、カリモフ大統領率いる現政権の暴力的転覆とカリフ制樹立を目指す国際的イスラーム過激主義組織が入念に準備したテロ行動に対する正当な対処であり、死者は一七六人(うちテロリスト七九人、軍・警察関係者三二人)とした。一方、国際人権団体や外国メディアなどによれば、一群の人びとが州庁舎に立て

こもりを開始した後、そばの広場に居合わせた数多くの一般市民に対して軍が無警告で無差別発砲をおこなったため、死者は三〇〇から数千にも上るとされている。そして、この事件の核でもある「二群の人びと」についても、公式見解が「アクラミーヤ」なる組織のテロリストが中心と断じるのに対して、国際人権団体・外国メディアなどは、「アクラミーヤ」への関与で逮捕され、事件直前まで裁判中だった地元の若手企業家三人の親族・友人らであり、事件の発端はその抗議行動がエスカレートしたものだ、かなり同情的な見方をしている。そもそも「アクラミーヤ」という組織についても、「暴力的なイスラーム過激主義組織」または「イスラーム的な富の分配の理念を實行しようとした青年実業家たちの自主組織」と、両者の見解は大きく隔たっている。

グローバルとローカルの歪み

上の人びとの「難民」問題、政府による事件後のアンディジャンの封鎖と情報統制、事件翌日におこなわれたという路上の負傷者の「始末」、女性や子どもたちの遺体の秘密裏の搬出、事件の証言者・人権活動家・ジャーナリストへの弾圧強化、国際的な第三者機関による客観的調査の拒否等々、ウズベキスタンのゆくえんに関心をもつ者にとっては目を覆いたくなるような、涙の出るようなニュースばかりだ。研究者としてこんなときどんな立場をとるべきなのか悩みつづいて、インターネットにかじりついて集めた政府系、非政府系のさまざまな情報の断片をつなぎ合わせてみると、政府系情報はどう見ても分が悪い。政権側はこうした状況を、アンディジャン事件の誇大報道という「情報による攻撃」によって現政権の転覆を図ろうとする陰謀だと激しく非難した。

一九九一年のソ連からの独立以降、ウズベキスタンがイスラーム主義をもつばら力で排除してきたこと、九・一一事件以降のアメリカの「対テロ戦争の正義」がウズベキスタンのそうした方向性を助長してきたこと、上海協力機構の枠組みでロシアと中国もそれと同調路線にあること、ウズベキスタンは二〇〇三年以来グルジア・ウクライナ・クルグズスタンと相次いだ「民主化革命」による政権交代の余波の到来を過大なまでに懸念していたことなどの背景をつないでいくと、こうした政



アンディジャンへの鎮魂歌

帯谷 知可 (おびや ちか)

京都大学地域研究統合情報センター助教授